

CoReLa

2018
2019
事業報告



人やモノや情報が国や地域を越えていくグローバル社会。
日本国内でも、学校で、地域で、職場で、
多言語・多文化状況が進んでいます。
グローバル化が進展するこれからの時代、
子どもたちの活躍の舞台はますます
世界に広がっていくでしょう。
こんな時代を生きていく子どもたちが
自分たちの未来を切り拓いていくために
必要な力は何でしょうか。
他者と対話する力、共感できる力、
異なることば、異なる文化の人びとと協働し、
新しい何かを創造する力……
私たちはこれらの力を育むための
外国語教育と交流事業を国内外で行っています。

CoReCa

Collaboration
Relation
Catalyst

人と **Collaboration** (協働) しながら、
Relation (関係) を築いていく。
TJF は人びとをつなぐ
Catalyst (触媒) でありたいと思います。

目次

- | | | | | | |
|----|---|----|--|----|---------------------------------|
| 2 | 評議員会長あいさつ | 14 | 日露の教師・生徒交流
交流学习で得た学び | 25 | くりっくにっぽん
先生たちのほしいに応える |
| 3 | 理事長あいさつ | 16 | 日韓の校長交流
できることから始める | 26 | りんごをかじろう
知らない文化にふれる |
| 4 | 多言語・多文化交流
「パフォーマンス合宿」
違うのはあたりまえ
違っているから豊かになる | 18 | 高校生のための隣語講座
ことばを使ってみる体験 | 27 | TJFを支援してくださっている方々 |
| 7 | 学校のソトでうでだめし
感性をひらき、思考を耕し、
ことばを増やす | 20 | 中国の日本語教育
制服をテーマに学びを深める | 28 | 事務局長交代のごあいさつ |
| 10 | ときめき取材記
リアルな日本社会とつながる | 22 | 学びの探究とデザイン
語って、ほぐして、仕込みます！
探究する学びを分析・デザインする | 29 | 組織 |
| 12 | 日韓の中高生交流
SEOULでダンス・ダンス・ダンス
本気を引き出す | 24 | 「外国語学習のめやす」の促進
「めやす」のさまざまな活用 | 31 | 財団概要 |



学びを深める



きっかけをつくる



つなげる



発信する



TJFが実施している事業を大まかに4つの
カテゴリーに分け、マークで記しました。ウェ
ブサイトでも同様のマークが使われています。
ぜひウェブサイトもあわせてご覧ください。



最近

AI(Artificial Intelligence) 人口知能)の研究者の方々と話をする機会がありました。一緒にどんなおもしろいことができるだろうかと話をするなかで、AIにできること、できないことに話がおよびました。AIにとって代わられてなくなる職業をしばしば耳にしますが、人間にしかできないことも当然残ります。それは一言でいうと人間力、つまり感情の豊かさであったり、コミュニケーションだったり、そしてそのコミュニケーションをとるなかで新しいモノを考え出し作り出すことなのだろうと思います。

新しいモノを作り出すときに必要なのは決断し動き出す力ですが、原点

はおもしろいと思えることです。おもしろいと思うには好奇心が必要で、好奇心を育むためには人と会ったり、本を読んだり、いろいろな経験をする

ことが大切なのです。そこで、"learn"について考えてみました。日本語ではstudyもlearnも「学ぶ」と訳せますが、両者の大きな違いは、learnにはexperience(経験)が入っていることです。読んだり書いたり教えてもらったりするstudyをしたうえで、さまざまな経験をするのがlearnなのです。人間力を高めるために好奇心をもって経験する、そしてその好奇心を育てるために人に会ったり本を読んだりさまざまな経験を

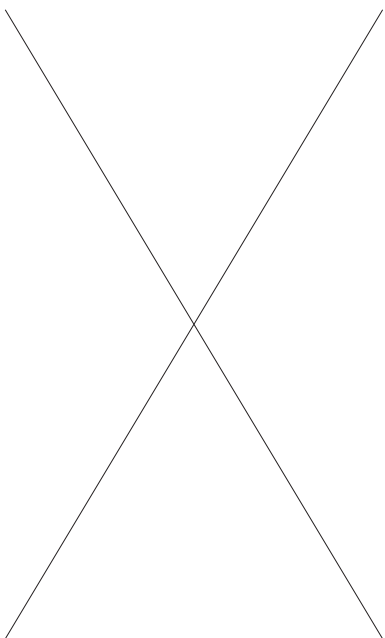
する、というように繰り返すことで、ら

せん状にlearnはどんどん深まっていきます。

これを若いうちからやっておくことはますます重要になってくるのではないのでしょうか。TJFは若い人たちの「やってみたい」気持ちを大切に、新しいことを体験できる場をつくっていきたいと思います。皆さまの一層のご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

の ま よ し の ぶ
評議員会長 野間省伸

Learnの勧め



経験が人生を支える

人は若いときに経験したことが、人生の根幹となることがあるものです。私の場合、思い返すと、20代での三つの出来事が挙げられます。

一つは、外務省人省後すぐに留学したアメリカの大学でのことです。そこで目の当たりにしたのは、講義後必ず学生が質問し、時には異議すら唱える光景でした。まさに民主主義の原点である言論の自由、発言の自由を体感したわけです。

二つめは、その2年後、シアトルの総領事館で勤務することになり、アパートを探していたときのことです。「空室あり」の看板が掲げられた部屋を借りようと不動産屋に行くと、今日決まったというのです。しかし2、3

日経つて前を通ると「空室あり」がそのまま掛かっていた。このときばかりはアメリカへの信頼が揺るぎました。1950年代末のことです。しかし1960年代に入り、アメリカでは公民権法が成立しました。歴史は進歩するものだと思うと同時に、民主主義への信頼はより強固なものになりました。

三つめは、帰国後に日韓の漁業問題に関わっていたときのことです。はりきりすぎたのか胃潰瘍で1ヵ月ほど休むことになりました。交渉が滞ったのではないかと申し訳なく思い出勤したところ、後任がすでに入り私の心配は全く無用でした。組織とは強いものであり、また強くあらねばならない

のだと痛感しました。しかし組織を支えているのは、一人ひとりの仕事への責任と努力です。

若い人たちが、後の人生に続くような経験をするを願ってやみません。TJFは若い人たちが新しい世界と出会うような場をつくってまいります。皆さまにはこれまでと同様ご理解とご協力をいただきますようお願い申し上げます。

わた な べ こう じ
理事長 渡邊幸治





違うのはあたりまえ 違っているから豊かになる

「文化が違うことへの違和感があった。でも『変だな』から（合宿後は）「かつこいい、おもしろい」になった。」

「自分のことが変だと思われないように周りに合わせていたけど、「自分は自分だから」と思えるようになった。」

右に紹介したのは、2019年3月に実施したパフォーマンス合宿後、参加者に書いてもらった合宿前後の変化です。

最終日の作品発表に向けて、演劇的手法を用いたさまざまな活動に取り組んだ3泊4日は、「濃い」「疲れる」ものでしたが、「これまででいちばん短い4日間」になったのです。

1日目

緊張した面持ちで会場に到着した31名を迎えたのは演出家、俳優、ダンサーからなるファシリテーターチームの5名と学生サポーターチームの4名。いろいろな言語でのあいさつ、じゃんけんなどアイスブレイキングのあとは、ダンスワークショップ。「知

らない人と話すのは恥ずかしい」などと言っている暇もなく、ペアやグループになって身体をフルに使った活動が続きしました。

2日目

発表会の舞台となる床に白いテープで世界地図を描きます。参加者とながりのある国・地域の境界線は青テープを貼ります。

次に、一人ひとりが「いちばん古い記憶」を絵にしました。園児のときに遊具から落ちたこと、バットを振っていてテレビモニターを壊したこと、初めて飛行機に乗ってジュースを飲んだこと……。

グループで共有したあとは、一人ひとりのストーリーをその主人公以外で演じ、全員の前で発表。

さらに、「言われてうれしかったことば」「悔しかった話」「人生でいちばん緊張した話」「幸せだった話」「今いちばん会いたい人」「キュンキュンした話」の6つのテーマからグループで一つずつ、一人の話を選んで演じます。



ペアになり、目隠しをした相手をことばを使わずに誘導しながら散歩。



相手の手のひらに合わせて動く。



グループでメンバーのサインネーム（ジェスチャーで名前を表現）を組み合わせで発表。



テープで地図を描く。

3日目

前日につくった一人ひとりの「古い記憶」と6つのテーマの作品を中心に、オープニング、エンディングなどを加え、発表作品の構成を考えます。身体感覚と信頼関係を高めるダンスワークショップで知った技法も使いながら各グループで工夫します。

4日目

「いくぞー」「おー」

全員で円陣を組み声を出しました。保護者や教師など、関係者を迎えて、いよいよ本番。床の世界地図の上で、



発表会後、輪になって4日間を振り返った。



合宿終了後に満開の桜の下で。

4日間を振り返って

合宿に参加して、みんなが使っている言語の多様さや通ってきたさまざまなルートに驚き、それまでに知らな

かった世界に出会います。しかし、違いを知ると同時に共通点も見えてきます。

参加前は「どうやって関わったらいのかわからない不安だった参加者は、「ことば、食事などは違うけど、みんな笑うところは一緒に笑うし、（自分が）疲れると（みんなも）疲れるし、そういうところがおもしろいって印象に残りました」と言います。

「友だちがジョークで言ったことばがその人を傷つけてしまい」「コミュニケーションの難しさを感じることもあります。でも、「個性豊かな仲間に出会えること、楽しんで多言語多文化を学べ」「自分の世界観が変わる」「ひとりでもふたまたわりも人として自分が成長できる」ことも合宿を後輩に勧めたい点として挙がりました。



多言語・多文化交流
「パフォーマンス合宿」はこちらから

写真はすべて但馬一憲

【事業データ】

多言語・多文化交流「パフォーマンス合宿」2018

期間：2019/3/25（月）～28（木）、場所：東京、ファシリテーターチーム：田室寿見子（演劇ユニットSin Titulo代表、演出家）、河野悟（NPO法人PAVLIC、俳優）、田中圭介（NPO法人PAVLIC、劇作家・演出家、大学講師）、田畑典希（タバマ企画、ダンサー・振付家）、藤持藍子（スペイン語通訳）、学生サポーターチーム：高瀬杏理、長野エドワルド、山岸笑璃、若尾颯太、参加者：日本を含む8地域、11言語をバックグラウンドにもつ日本在住の高校生計31名

学生サポーターの活躍

2018年度は、参加者に年齢に近い学生にサポーターとして協力してもらいました。4名のうち3名は前回の参加者で、2名が海外につながりがあります。ワークショップでの活動で最初にモデルを示したり、参加者の声をファシリテーターに伝えたりする役割を担ってもらいました。戸惑ったり動きが止まったりしている参加者に気づくと、そっと近くに行き話を聞くなど大いにサポートしていました。

3日目の夕食後に設けた「先輩の話を聞く会」では、参加者がグループに分かれ4人を囲みました。

山岸 笑璃

高2、第1回参加者



両親、祖父母みんな日本人で海外に住んだこともないのに、私は外見も中身も「日本人らしくない」と言われ、そのことが原因で高1のときにい

じめのようなこともありました。「私って何だろう？」と考えていたときに、前回の合宿に参加しました。合宿で「ありのままの自分でいいんだ」って気づいて、人間関係をリセットして自分がやりたいことをやるようになりました。

そのことを「先輩に話を聞く会」で話したら、「どうやってリセットできたのか」と聞かれました。合宿の参加者がたまたま同じクラスにいたこともありですが、もしいじめられてもきっと合宿の仲間たちが受け入れてくれると確信的なものがあったからだと答えました。



学生サポーターには感謝状が贈られた。左から、若尾さん、山岸さん、高瀬さん、長野さん。

高瀬 杏理

高3、第1回参加者



「先輩に話を聞く会」では、ハーフであることの良いことと悪いことについて自分が口火を切って話しました。悪いことは、自分が何人なのか本

当にわからなくて、小さい頃から周りとの違いを意識しすぎたり疎外感を感じたりすることが多かったこと。良いことは、それのおかげで自分とは違っていることも受け入れようと思えるようになったこと。それと嫌なことを経験したこととで強靱なメンタルを手に入れることができたことです。

このとき初めてプライベートな話をしたことで、参加者に一人の人間として興味をもってもらえたみたいです。

お菓子は共通言語？

参加した31名とつながりのある国・地域はインド、オーストラリア、韓国、中国、ネパール、フィリピン、ブラジル、日本。使っている言語は11に上ります。

さまざまなことばと文化を肌で感じてもらうために、韓国語、タガログ語、中国語、ネパール語、ヒンディー語、ポルトガル語などで描かれた絵本、それらの国・地域でよく知られているお菓子をテーブルに並べました。

休憩時間にはいろいろな言語の絵

本を手にとって見比べたり、ことばを教えあったりしていました。

お菓子のテーブルでは、食べたことのないお菓子里に興味津々。「どんな味？」「これ、おいしいよ」「どこのお菓子？」と声が上がっていました。



「学 校のソトでうでだめし」は、中高生が、日常ではあまり出会わない他校の生徒やさまざまな分野を専門とする大人たちと関わりながら、表現、創造、思考、議論などを体験するプログラムです。新しい知識や視点、表現方法などを得て、自分の枠を広げたり、多様な人たちが社会と自分はどう関わるのかについて考えを深めたりするきっかけとなることをめざしています。

賞者はほかの参加者との対話だけでなく、作品として自分自身との対話を重ねていくことにもなります。作者やタイトルなどの情報は、最初は明かさず、作品を観察して気づいた視覚的な「事実」と作品から自分が感じたり考えたりした「解釈」の両方を、一人ひとりがことばにして場に差し出していきます。参加者たちは、そうして積み重ねられた事実と解釈をもとに、作品鑑賞を深めました。

*1 Visual Thinking Curriculum
*2 Art Communication Project

2018年度に実施した「アート作品を味わう。コトバにする。コトバをきく。カタチにする。」では、岡崎大輔・京都造形芸術大学アート・コミュニケーション・研究センター（ACC）副所長にファシリテーターをお願いし、対話型鑑賞を活動に取り入れました。対話型鑑賞は、ACCがニューヨーク近代美術館のVTCをもとに開発したACOPという美術鑑賞の手法にそって進みました。スクリーンに映し出されたアート作品をみながら、「みる」「考える」「話す」「聴く」の4つを繰り返します。そのプロセスで、鑑

賞者はほかの参加者との対話だけでなく、作品として自分自身との対話を重ねていくことにもなります。作者やタイトルなどの情報は、最初は明かさず、作品を観察して気づいた視覚的な「事実」と作品から自分が感じたり考えたりした「解釈」の両方を、一人ひとりがことばにして場に差し出していきます。参加者たちは、そうして積み重ねられた事実と解釈をもとに、作品鑑賞を深めました。



@金子悦史

みる

すみずみまでアート作品を観察する。

考える

作品から自分が何を感じ、考えるか。作品のどこからそう感じ、考えるのかに意識を向ける。

聴く

ほかの人が感じたこと、考えたことを、じっくり聴く。

話す

感じたこと、考えたことなどを、ほかの参加者に伝えるように言語化する。

【事業データ】

学校のソトでうでだめしvol.2「つくる。味わう。広告コピー。——本の魅力を一行で伝える」
期日：2019/3/23（日）、場所：東京、ファシリテーター：近藤祐晃（株式会社電通CMプランナー、（一財）生涯学習開発財団認定ワークショップデザイナー）、参加者：中高生8名

学校のソトでうでだめしvol.3「アート作品を味わう。コトバにする。コトバをきく。カタチにする。」
期日：2019/3/28（木）、場所：東京、ファシリテーター：岡崎大輔（京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センター副所長）、参加者：中高生8名



「学校のソトでうでだめし」の詳細はこちら

体験を振り返って…

- 意見や考えを聞かれる場面で「私も同じです」と言って流してしまいがちでしたが、全く同じ考えの人なんていない、ということがわかりました。
- 黙っているのではなく、自分の考えをことばにして伝えることで、ほかの人から違う視点をもらうこともでき、自分の考えが変わったり、磨かれていったりするんだと気づきました。

対話型鑑賞を体験する

左の作品をみた第一印象や気づいたこと、感じたこと、疑問など、何でもいいので話していきましょう。



絵に使われている赤い色に着目



＜事実＞

- 真ん中の男性が持っている筆の先に赤色がついている。
- 左手の川の流れに赤が混ざっている。
- 雲のなかに赤が使われている。



＜解釈＞

- この男性は赤を使いたいという意志があって、背景の絵を描いているのではないか？
- 絵の中心にいるのも、後ろの絵を描いている人だからではないか？

30分経過

全体の視点が絵の左右の比較に移る

奥にタワーのような建物があって近代的、工業的にみえる。

中心の男性を境に左右で違う世界を表現している。

左に比べてのどかな風景。

道がずっと奥まで続いている。

川や船など色調が暗め。

水辺の人物が黒い服なのは個人が尊重されていないということではないか。

男性は右側の明るいほうに向かって道を歩いてきたが、一回立ち止まったときに左側の暗い過去がみえて、こういう複雑な顔になったのではないか？

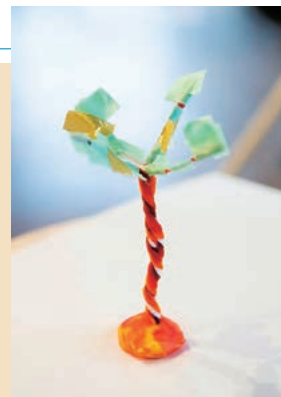
あなたの今をカタチにする

みんなと鑑賞の時間を過ごしてきて、今、あなたの身体や頭、心のなかにあるものをカタチにするとどんな感じ？

いろんな人の考え方をまぜて新しい考えをつくるという体験をした。色つきのモールはそれぞれの人たちの考え方。自分は白。



◀左の絵
アンリ・ルソー 《私自身、肖像＝風景》
プラハ国立美術館



@金子悦史

下の粘土は今日みた絵で、葉っぱはいろんな意見やアイデア。幹はいろんなものを吸収して育つ自分の考え。



リアルな日本社会とつながる

2016年度にスタートした「ときめき取材記」。大学などで日本語や日本事情を学ぶ学生たちが、それぞれの興味関心から何か一つテーマを決め、それに関係する人にインタビューしてまとめた記事でTJFのウェブサイト「ときめき取材記」で発信するプロジェクトです。

2018年度は国内外あわせて5校がプロジェクトに取り組み、8本の記事がウェブサイトに掲載されました。授業の枠が日本語か日本事情か、対象が留学生のみか日本人と留学生の共修かなど、学校により異なりますが、インタビューを中心とした一連の活動のなかで、学生たちはリアルな社会とつながります。インタビューの依頼ひとつをとっても、メールの書き方を調べたり、引き受けてもらうためには何を書けばいいのかを考えたり、試行錯誤しながらの挑戦です。また、TJFのサイトに公開されることで、学生たちには自然と責任感が芽生えます。

学生たちは、テーマについて考え、インタビューを探すときに、日本の社会や文化を多面的に見ることになります。そして、インタビューから、時にはグループのメンバーから、思いもかけなかった視点や意見を聞き、自分と異なる考えの存在に気がついていくのです。

一方でウェブサイト「ときめき取材記」には多様な視点や考えが集まっています。さまざまな人の生き方を紹介すること、枠にはまった日本ではなく、変化を続ける今のリアルな日本の一面を伝えることになり、さらに、多様なバックグラウンドをもつ学生によって企画・発信がなされることで、日本の多面性を提示することにつながります。

また、複数の学校が同時に取り組んでいることもこのプロジェクトの特長です。TJFではウェブ上にプロジェクトに取り組んでいる教師のグループをつくり情報共有しています。また2018年度は、TJFが提供する資料の有効性を検討したり、実践過程で生じた問題や課題、その解決法などについても情報交換したりする勉強会を開きました。

私は、授業を通して多様性の価値に気づくころに、「日本事情」の意味があると考えています。そのうえで、新しい文化を発信できるようになることをめざしています。「ときめき取材記」はまさに、「日本事情」の今あるべき姿を体現できる教育コンテンツだと感じます。今後多くの学校に広がり、教員の横のつながりが生まれることで、プロジェクトの質も高まっていくはずです。

テーマを設けることで思考が広がる



三代 純平
武蔵野美術大学
准教授

本校では「日本事情」をキャリア教育の一環と位置づけ、キャリアについての視野を広げることをめざして「ときめき取材記」プロジェクトに取り組んでいます。2018年度は、「アートな仕事」というテーマを設定しました。アートを学ぶ学生たちに、仕事について考えてもらう機会になればと思ったからです。

4〜5人のグループでインタビューの企画書をつくる過程で、それぞれのグループに「アートな仕事ってそもそも何なんだろう?」と問いが起きました。「アートな仕事って必ずしも芸術に関わる仕事だけじゃないんじゃない?」という意見が出るなど、テーマは想像以上の広がりを見せました。そして、この問いへの思考はインタビューで深まっていきました。インタビューで予想とは全く違う話を聞いた学生たちは大きな衝撃を受けて帰ってきます。それから「文字起こし」で話をじっくり聞き直すなかで、インタビューのこぼれにあるものに思考を巡らせていきます。テーマを設けることで、そのテーマ自体への問いが生まれ、思考が広がっていったのです。その結果、日本社会をより多角的に見ることにつながったようです。

私は、授業を通して多様性の価値に気づくころに、「日本事情」の意味があると考えています。そのうえで、新しい文化を発信できるようになることをめざしています。「ときめき取材記」はまさに、「日本事情」の今あるべき姿を体現できる教育コンテンツだと感じます。今後多くの学校に広がり、教員の横のつながりが生まれることで、プロジェクトの質も高まっていくはずです。

ときめき取材記

武蔵野美術大学編

テーマ 「アートな仕事」 …アートな仕事って何だろう?

「広い年代の人に受け入れられる自己表現」がアートな仕事ではないか?

そこで…

幅広い世代から愛される「無印良品」の創案に参画したグラフィックデザイナー、麴谷宏さんにインタビューしました。



記事はこちら→



- 「アートな仕事」は自分たちが考えていたよりずっと身近で、多くのものに関係していたことがわかりました。
- 「目で見える範囲、手が届く範囲全部はデザイン」という話に、自分も怖がらず新しい挑戦をしたいと思いました。

彫刻や絵画だけでなく、身近なものをつくるのも「アートな仕事」だね。

そこで…

「うさぎ & くま100%」で有名なLINEスタンプクリエイター、ヨッシースタンプさんに、インタビューしました。



記事はこちら→



- スタンプはキャラクターに注目してつくられているものだと思っていましたが、ヨッシーさんは言語に注目していたのです!
- 尊敬できる大人に初めて会うことができた、そう思えるほど、衝撃を受け、見習っていききたいと思いました。

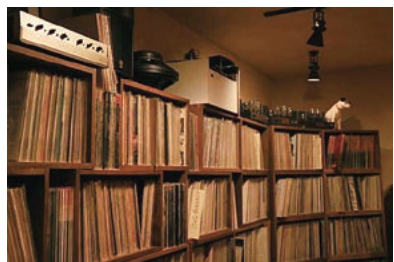
好きなことを精一杯やるのが「アートな仕事」なんじゃないか?

そこで…

ジャズ喫茶店「Bunca」のオーナー、山口元康さんにインタビューしました。



記事はこちら→



- 山口さんのコーヒーに対するこだわりやお店とお客さんへの愛情が彼がつくり出すアートだと感じました。
- 自分の手でコーヒーとジャズが流れる空間をつくり出すのもアートな仕事だと感じました。

「ときめき取材記」ウェブサイトから一部抜粋

【事業データ】

「ときめき取材記」プロジェクト

期間：2018/4〜2019/3、参加者：上田安希子（群馬県立女子大学講師）、荻野雅由（ニュージーランド・カンタベリー大学講師）、三代純平（武蔵野美術大学准教授）、矢部まゆみ（横浜国立大学講師）、義永美央子（大阪大学教授）



「ときめき取材記」ウェブサイトはこちら



本気を引き出す

照明が舞台を照らし出した瞬間、大きなよめきが起きました。

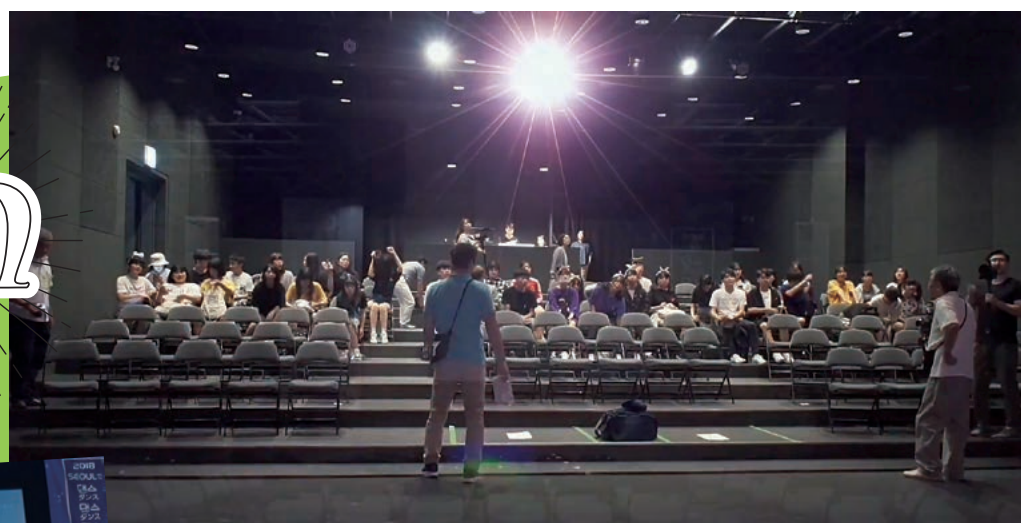
SEOULでダンス・ダンス・ダンスの韓国・ソウルでの1日目、日韓の中高生40名が発表会場の下見に行ったときのことです。2018年度の会場は秀林アートセンターのホールで、プロのダンサーが公演する本格的な舞台です。観客席に座って舞台を見たり、舞台上上がってステージの幅や奥行きを何度も確認したりしました。また同アートセンターでは、これまで実施した6回の記録写真展が開かれ、一般の人たちにも公開されました。

このプログラムでTJFがめざしているのは、全日程が終わったときに、参加者がさまざまな価値観をもつ人がいることを知り、一緒に何かをすることへの興味関心が広がっていること、お互いのことばをもっと学びたくなっていることです。そのためには楽しみながらも本気で活動に取り組むことが大事だと考え、本気を引き出すために、ホンモノに近づける仕かけをつくっています。チームごとに発表会

用の衣装を買い出しに行ったり、チーム名とロゴを考えたりするのもそのためです。そして、2018年度に行った仕かけが冒頭で紹介したホンモノの舞台でした。発表会では、それぞれのグループのロゴをスクリーンに映し出し、より臨場感を高めました。

ONOFF

ダンスグループ以外の参加者ともことばを交わしてもらうために、部屋ではダンスとは別のグループを編成しています。発表会が近づいてくるにつれ、ダンスグループはピリピリした雰囲気になっていきますが、部屋に戻るとたわいもない話をして笑い転げたり、互いのことばを教えあったりするいわばOFFの時間が流れます。ある参加者は「部屋に戻ると緊張がほじめてほっとした。ここがあったから、ダンスチームに戻って頑張れた」のだと言います。こうした時間とともに過ごした最終日、「また会おうね」と言いながら別れていきます。その後SNSでやり取りを続け、再会する参加者も少なくありません。



本格的な舞台の発表会場。本番をイメージし、何度もステージの大きさを確認する。

発表会当日の会場演出

開会と同時にオープニングMOVIEを上映。チーム入場時にはチームロゴをスクリーンに投影し、その華やかな演出で観客をわかせた。

©但馬一憲

プログラムの写真展を開催

過去6回分の記録写真を展示し、一般にも公開。参加者たちも先輩たちの写真から発表会のイメージをつかんだ。

©但馬一憲

事前にSNSで交流

集合までの約2か月、全員がSNSを通じて、自己紹介やグループでの話し合いをしていたことから、すぐに打ち解けることができた。

©但馬一憲

OFF



部屋グループでの交流

発表会に向けて、時にぶつかり、意見を調整しあうメンバーとは別のメンバーと過ごす時間は、リラックスできる。

ラーメンパーティー

誰が企画したのか、宿舎で行われていたラーメンパーティー。遅い時間までプログラム外の交流は続いた。



©但馬一憲

【事業データ】

日韓のことばを学ぶ中高生交流プログラム「SEOULでダンス・ダンス・ダンス2018」
期間：2018/8/7(火)～12(日)、場所：東京（事前研修）、韓国・ソウル 主催：（財）秀林文化財団、TJF、実施：秀林外語専門学校、韓国日本語教育研究会、TJF、助成：（公財）日韓文化交流基金、協力：高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク（JAKEHS）、輸送協力：ANA、旅行取扱：ジエイエツチー（株）、参加者：韓国語を学ぶ日本の中高生20名、日本語を学ぶ韓国の中高生20名

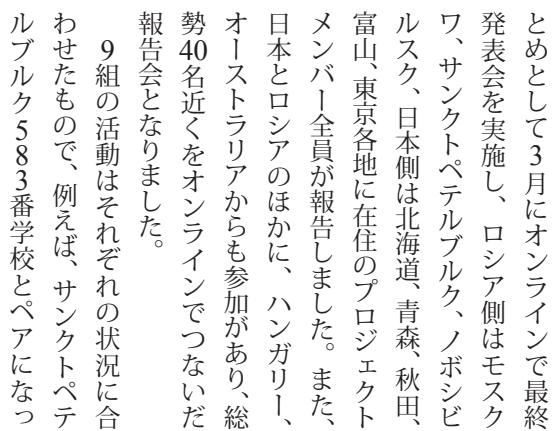


「SEOULでダンス・ダンス・ダンス」はこちらから

2

4月の事前研修から3月の最終発表にいたるまで金孝卿・早稲田大学准教授にプロジェクトアドバイザーとして参加者に伴走してもらいました。

事前研修では、プロジェクト型研修の枠組みと考え方、交流学习計画のフォーマットなどを共有しました。ペアで作成した言語・文化・交流の各項目における学習目標、手順、評価に対して、目標と評価の整合性や活動と目標のつながりなど金先生がひとつずつ



とめとして3月にオンラインで最終発表会を実施し、ロシア側はモスクワ、サンクトペテルブルク、ノボシビルスク、日本側は北海道、青森、秋田、富山、東京各地に在住のプロジェクトメンバー全員が報告しました。また、日本とロシアのほかに、ハンガリー、オーストラリアからも参加があり、総勢40名近くをオンラインでつないだ報告会となりました。

9組の活動はそれぞれの状況に合わせて、例えば、サンクトペテルブルク583番学校とペアになっ

交流学習のプロセスで 教師が得た大きな力

私が想定していたよりもダイナミックな変化が先生たちには起こりました。特に大きく変わったのが11月に顔を合わせて会合を行ったときでした。ペアごとに最初に立てた計画を見直した結果、学習目標も手順もより具体的で実践的になりました。例えば直接交流ができない場合は無理してコミュニケーション目標を立てるのではなく、母語を使ってやさしく説明するようにするなど、現実には照らしたことでそれぞれの活動に多様性が出てきました。そして特徴的だったのは、言語を何のために使うのかが強く意識されるようになったことです。目標言語を使うことだけにとどまらず、母語での活動を促したり、論理的に考えたりといった活動が入ってきました。スキルや方法だけではなく、なぜその活動が必要なのかという根本的なところの議論になっていたのだと思います。

交流そのものは経験したことがあっても、交流学習は初めてというペアもかなりいました。単に交流するだけでなく、それを学習におとしこむためには目標をもってデザインすることが重要です。さらに、交流学習は教室対教室で終わるものではありません。ほかの教科の先生からも協力を得るのか、学校全体を巻き込むのかなど、どんな交流の場をつくるのかを考えて、周囲の人たちに働きかけなくてはいいけません。教師の協働なくしては交流学習の実現は難しいのです。

教師と一緒に何かをするのはものすごくエネルギーのいることですが、歩調をあわせゴールに向かう経験は教師にとって大きな力になります。さまざまな情報に簡単にアクセスできるようになりましたが、こうした活動のプロセスを体験することでしか教師の真の成長はないのではないかと思います。このプロジェクトではまさにそのプロセスをみなさんが対話を通して経験したのです。

交流学習プロジェクト

①中間報告会 ②互いのことを教える日露教師合同研修会

③交流学習プロジェクト参加教師会合

期日：①2018/11/2(金)、②2018/11/3(土)、③2018/11/4(日)、場所：ロシア・サントペルブルク、助成：(一社) 尚友倶楽部、会場：運営協力：ロシアキリスト教人文アカデミー、広報協力：①②在サントペルブルク日本国総領事館、講師：アドバイザー：金孝卿(早稲田大学准教授)、参加者：①41名(内)14名プロジェクトメンバー、②32名(内)14名プロジェクトメンバー、③14名

「日露交流学習プロジェクト」最終報告会(オンライン)

期日：2019/3/31(日)、ファシリテーター：金孝卿(早稲田大学日本語教育研究センター准教授)、テクニカルサポーター：大隅紀子(東京大学ほか講師)、参加者：36名(内プロジェクトメンバー18名)

日本語図書・教材・教具寄贈

期間：2018/4～2019/3、5校（ノホシビルスク3校、サントペテルブルグ2校）合計208点を寄贈



「日露交流」
の詳細はこちらから

依田 幸子

プロジェクト実施期間にいくつかの活動を行いました。予想以上に生徒の反応が大きかったのが「小さな贈り物交換」でした。ペアとなった相手に、メッセージを添えて小さな贈り物をする活動です。それまでに行っていた手紙交換の内容から、相手が喜んでくれるものを想像してプレゼントを決め、贈ったあとも「喜んでくれるだろうか」と心配していました。実際にプレゼントを受け取る場面をお互いの教師がビデオ撮影し、開封したあと笑顔で「ありがとう!」と言っている場面をそれぞれの教室で共有しました。プレゼントした物だけではなく、お互いを思いやる気持ちが届いて、あたたかい心がつながる交流になったのです。つながりを感じることができ、この交流学習は、生徒の学習意欲に大きな影響を与えました。

今回のプロジェクトでは、教師同士で教材やアイデアを共有したり、ペアの相手だけでなくさまざまな先生にアドバイスをもらったりしました。そのことで、多角的なアプローチ方法を手に入れることができました。先生方とはプロジェクトが終了したあとも、今なお良い交流が続いています。

交流学習プロジェクトの流れ

2018/4月 事前研修(オンライン)。

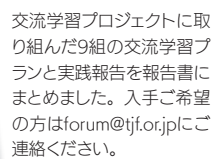
2018/4~9月 交流学习プランの作成。アドバイザーがフィードバック。一部のペアが実践を開始。

2018/9~11月 すべてのペアが実践を開始。

2018/11月 日本メンバーをロシア・サンクトペテルブルクに派遣。中間報告会と合同研修を実施。

2018/11月～
2019/3月 プランの改善と実施の継続。

2019/3月 最終報告会(オンラインで公開)。





できることから始める

日韓の校長が顔を合わせ教育方針や理念、自分の考えについて意見交換する。校長自身が交流を体験することが生徒の交流につながる。と考え、2015年度に日韓の校長交流プログラムを開始しました。実務を担当する教師も加え、日本側が韓国を、韓国側が日本を訪問し、互いの理解がより深まるように二度会う場を設定しています。2018年度も8月に日本の校長と教師14名が韓国・ソウルを、11月に韓国の校長・教頭と教師19名が東京を訪問しました。

ソウルでの出会い

ソウルで訪問した高校では、一生懸命日本語で話をする生徒と接し、学校生活について直接話を聞くことで、「第二外国語教育をもっと発展させていこうと思った」という日本の校長は少なくありません。また、ソウルで学ぶ日本の学生から留学の理由や将来について聞き、自分の生徒たちに会わせたいと思ったり、大学の留学担当者から情報を得て、留学を希望する生徒の指導に役立てようと思ったりした

さまざまな出会い



訪問した学校で、ソウルでは日本語を学ぶ生徒が、東京では韓国語を学ぶ生徒が校内を案内してくれる。日本語／韓国語で一生懸命話す生徒の姿に心を打たれる。



@ソウル・漢西高校

日本語／韓国語を学ぶ生徒



@東京・蒲田女子高校

© 但馬一恵

社会人／留学生



@ソウル

東京で活躍する韓国の社会人や韓国に留学・進学した日本の学生の話聞く。留学の理由は何か、どんな将来像を描いているのか、どんな仕事をしているのか話を聞くことで、生徒の進路選択肢の一つが具体的に見えてくる。



「日韓の校長交流」の詳細はこちら

ようです。

東京での出会い

一方、韓国の校長・教師も韓国語を学ぶ生徒に校内を案内してもらったり、日本で活躍する韓国の社会人や留学生と話をし、日本の校長・教師と同じように、自分の生徒と会わせたい、生徒の卒業後の進路の参考になったといった感想がありがりました。そして二度目となる校長・教師との交流では、学校訪問について具体的な計画を進めたところもありました。

どんな交流を希望しているのか

このプログラムがきっかけとなって、これまでに6組が交流校協定締結にいたりしましたが、協定締結だけが目標ではありません。希望する交流の形態を聞くと、韓国側は10校のうち9校が訪問を、5校が受け入れを望んでいました。一方、日本側は10校のうち2校が訪問を、7校が受け入れを希望していました。実際、韓国の高校が日本の高校を訪問するケースが多いようです。また、すぐに生徒の訪問はできなくても教師の訪問から始めたり、複数校で1校を訪問したりと、できることから交流が始まっています。

校長・教師



@東京・東京都立王子総合高校



@ソウル

学校訪問や交流会で校長・教師と会い、教育システムや理念について話す。意気投合し、交流の話が一気に進むこともある。

韓国の大学関係者



@ソウル

韓国の大学関係者に話を聞くことで、日本の高校卒業後の進路の一つとして韓国の大学進学が考えられるようになる。

長所を学び合う



ジン ソンニョン
陳 成龍

韓国・世賢(セヒョン) 高等学校
校長

2018年11月にTJFのプログラムで東京の高校を訪問していろいろと感ずることがありました。訪れた東京の2校では、生徒たちは積極的に授業を受け、ルールも守っていました。その秘訣は何なのかが気になりました。私が見た日本の教育環境を自分の学校の教員にも見てもらいたいと思い、2019年1月に10名の教師と共に日本を訪れました。

今回の経験をもとに、日本の教育の長所を自校でいかすよう工夫していきたいと思ひます。時間がかかったとしても、生徒たちによりよい教育環境を提供するために、双方の長所をうまく融合していくなかで、教員たちの意識が変わっていき、きっと成果につながると思ひます。教育の質は教員の質を超えないといわれますから、教員が変わらなくてははいけません。

学校教育をどうするかは校長のマインドにかかっています。その点で校長同士が交流することにはとても意味があると思ひます。そしてゆくゆくは教員、生徒の交流につながって、両国の高校がわかりあえたらいいと思ひます。

【事業データ】

日韓校長交流プログラム(派遣)

期間：2018/8/4(土)～7(火)、場所：韓国・ソウル、主催：東京韓国教育院、神奈川韓国総合教育院、国際交流基金ソウル日本文化センター*、TJF、協力：千葉韓国教育院、埼玉韓国教育院、輸送協力：ANA、旅行取扱：ジエイエツチシー株式会社、参加者：東京、神奈川、千葉、大阪、岡山の計10校から高等学校校長等14名
* 8/6(月)の日韓校長および教師交流会を国際交流基金ソウル日本文化センターと共催した。韓国・江原道、京畿道、ソウル特別市、大邱広域市の11校から高等学校校長等23名の参加があった。

日韓校長交流プログラム(招聘)

期間：2018/11/21(水)～24(土)、場所：東京、主催：TJF、助成：韓国国際交流財団**、協力：国際交流基金ソウル日本文化センター、東京韓国教育院、神奈川韓国総合教育院、輸送協力：ANA、参加者：韓国・江原道、京畿道、ソウル特別市、水原市、大邱広域市の10校19名の高等学校校長と教員

** 招聘期間中に実施した日韓校長・教師交流会の日本側参加者の費用を助成。



ことばを使ってみる体験

グ ローバル化が進展するなか、外国語教育は熱を帯びているように感じられます。しかし、英語以外の外国語の科目を開設している高校等は677校。全体の約13%と決して多くはありません。そしてさらに、学校が多様な外国語を学べる環境をつくらうと科目の設置を考えていても、履修希望者が必要な定員数を満たさず、開講できないこともあるようです。さまざまな言語にふれる機会が少なく、その言語を学びたい気持ちが育たないこともその要因の一つだと考えられます。

れてもらいました。

TJFがこだわるのは、ことばを学ぶために活動するのではなく、活動をするためにことばを使うこと。各言語の担当講師に、活動

を楽しむために自然とことばが必要となるように講座をデザインしてもらいました。TJFが開催している韓国語講座に通う高校生に、韓国語を学ぶ理由を聞くと、「K-POPが好き」「ダンスがしたい」など、ことば自体ではないきっかけがあるからです。

隣語講座では、卓球をしながら中国語でゲームスコアのカウントや応援をしたり、ダンスを踊るために韓国語の前後左右の言い方を覚えたり、楽しそうに取り組む生徒たちの姿が見られました。

講座後に実施したアンケートでは、オリエンテーションが言語選択のきっかけになったと答えた生徒が約94%に上りました。2019年度は王子総合高校のほかにも2校でオリエンテーションに協力します。

* 文部科学省「平成27年度高等学校等における国際交流等の状況について」より



配付した2本のリストバンド。色でその日体験する言語がわかるようになっている。

三比一
3対1

加油
頑張れ

中国語

中国語で点数をカウントしたり、応援したりしながら卓球を楽しんだ。



ドイツ語

ドイツ語にふれながら iPod を利用したオリエンテーションゲームやクイズに挑戦した。



スペイン語

ヨーロッパ屈指のプロサッカーチームであるFCバルセロナのトレーニングの一端にふれた。



写真はすべて劉成吉

韓国語

K-POPの紹介とダンス。講師のダンスをお手本にしながら一部を実際に踊った。



앞으로
前に

오른쪽
右

왼쪽
左

뒤로
後ろ

フランス語

2010年のドイツ年間ゲーム大賞に輝いたフランス発のボードゲーム「DiXit」で遊びながらフランス語にふれた。



ふれて初めて育つ
「学びたい」気持ち

角屋 章

東京都立王子総合高等学校
教諭



講座での「外国人を交えてみんなでゲーム」という日常にはないシチュエーションは、生徒にとって大きな刺激だったようで、皆楽しそうに取り組んでいました。実施後のアンケートでも、「〇〇語の体験をして楽しかったから、来年は〇〇語を選びます」というコメントが多くあがりました。グローバルランゲージの選択に与えた影響は小さくありませんでした。元々生徒たちは国際交流や第二外国語に「楽しそう!」と関心を寄せています。しかし、日常で異文化や外国語と接することが少ないことから、主体的に学べる機会には恵まれていません。とにかく「はじめての一步」が必要であることを痛感しています。

【事業データ】

日時:2018/9/27(木)、場所:東京都立王子総合高等学校、主催:TJF、協力:アンスティチュ・フランス東京、ゲーテ・インスティトゥート東京、東京韓国教育院、FCバルセロナアカデミー葛飾校、講師:ガエル・フレネアル(アンスティチュ・フランス東京教育コーディネーター)、マティアス・フォン・ゲーレン(ゲーテ・インスティトゥート東京語学部長)、徐明煥(東京韓国教育院講師)、アンドレウ・セラロス(FCバルセロナアカデミー葛飾校テクニカルディレクター)、田村由琴(新座卓球クラブ)、参加者:王子総合高等学校1年生(237名)



「りんごをかじろう:高校生のための隣語講座」の詳細はこちら



制服をテーマに 学びを深める

T JFは第二外国語用日本語教材『好朋友』の共同制作以来、『好朋友』が提案する日本語教育の実現に向けて、大連教育学院とさまざまな事業を行ってきました。

2018年度は、11月の制服デザインの前ゼン大会を目標に数カ月をわたって「制服」をテーマに日本語の授業を行う「わたしたちの学校の制服をデザインしよう」プロジェクトを実施しました。漫画やアニメで中高生になじみのある「制服」をテーマにさまざまな活動を行うなかで、思考力、創造力、表現力を高めることを目的としました。

プロジェクトは2018年5月の教師研修から始まりました。研修で先生方は、一つのテーマで複数回の授業を組み立てるにあたり、その意味やねらい、また具体的に制服をデザインするときのポイントについての講義を聴き、その後具体的な授業計画を考えました。

学校の特徴を制服に

9月末に各学校で代表グループを

決定し、10月には大連教育学院によるビデオ審査が行われました。その結果、大連市内の中学校17組から10組が、高校13組から3組が選ばれました。これら13校に、好朋友日本文化体験の場を有する上海市工商外国语学院と広東省・中山市外国語学校を加えた計15校が11月に大連教育学院の講堂で開かれた発表会に登壇しました。

審査は、地域や学校の特徴が制服のデザインに反映され、オリジナリティーがあるか、プレゼンテーションに工夫があり、日本語が流ちょうで正確かどうか基準となりました。高校の部で最優秀賞を受賞した大連市第16中学は、デザインの専門性が高く、高校生らしさに加えて中国らしさも表現できていて、生徒たちに着たいと思われるようなものであることが高く評価されました。

5月の研修会で講師を務めた林洪・北京師範大学准教授は、どの制服もよく調べてまとめたという評価する一方で、もっと生徒に考えさせるプロセスを入れることが必要であり、今回のような活動を通じて、思考力や表現力を育成できると語りました。

2019年度は、「文化を授業に取り入れる」ことをテーマに研修を実施します。

研修会 5月

授業の流れ

11月 発表会

広東省はとても暑いので、見た目が涼しい色を選びました。

中山市外国語学校

設計理由

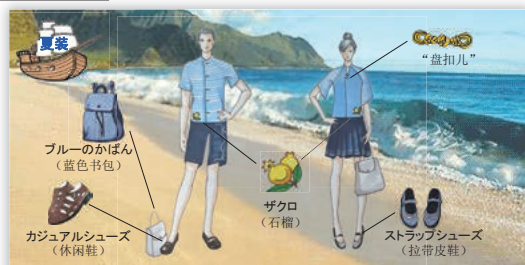


白い菊の花の意味は純粋と生命力。この制服を着る学生もそんな人になりたいと思うようにデザインしました。

菊は学校がある小らん市の象徴。

因为广东省很热，所以选了看起来凉爽的颜色。

大連市第16中学



ザクロは学校名の16と発音が同じ(shiliu)なので、制服のアクセントにしました。

青是水、白は波で大連の海を表します。

【事業データ】

「わたしたちの学校の制服をデザインしよう」プロジェクト

中高校日本語教師研修

期日：2018/5/26(土)、場所：中国・大連市、共催：大連教育学院、TJF、助成：(公財)三菱UFJ国際財団、講師：岩間晶子(韓国仁川大学講師)、横山豊子((株)このみ副社長)、林洪(北京師範大学外国語文学学院日文学系准教授)、参加者：60名

成果発表会

期日：2018/11/16(金)、場所：中国・大連市、共催：大連教育学院、TJF、助成：(公財)三菱UFJ国際財団、審査員：楊慧(大連教育学院日本語指導主事)、李煒(遼寧師範大学日本語学科教授)、横山豊子((株)このみ副社長)、水口景子(TJF事務局長)、参加者：大連市13組、上海市、中山市各1組、計15組(中学10組、高校5組)

参加教師の振り返り

期日：2018/11/17(土)、場所：中国・大連市、主催：TJF、助成：(公財)三菱UFJ国際財団、ファシリテーター：武田育恵(日本語教育専門家)、アドバイザー：林洪(北京師範大学外国語文学学院日文学系准教授)、参加者：大連市と黒龍江省の日本語教育指導主事各1名、大連市、上海市、中山市の日本語教師8名

日本語教育でめざすこと

林洪(北京師範大学准教授)

2017年に発表された「課程標準」に照らし、これからの日本語教育が何をめざし、どんな力を育てようとしているのか、そのためにはどんな活動をすればいいのかについて講義があった。

制服をデザインするポイント

横山豊子((株)このみ副社長)

制服のデザインに必要なのは、見た目だけでなく、学校の伝統や校風を取り入れながら未来を指向しているもの、生徒が誇りをもって着られるものを基本にして素材やデザインを考えることだと説明があった。

制服をテーマにした実践

岩間晶子(韓国・仁川大学講師)

学生は制服に関連する単語を学びながら、制服をデザインし、プレゼンテーションした実践を紹介し、プロジェクト型学習の意義について話があった。講義後、参加した教師はグループに分かれ授業計画を考えました。



1時間目

日本の制服のイメージをつかむ

- ・自分の制服のイメージを考える
- ・日本の制服のイメージを思い浮かべる
- ・学園ドラマや映画で使用されていた制服を見る
- ・実際に日本の制服を着る

2時間目

制服のデザインを考える①

- ・制服に関する単語を学ぶ(シャツ、スカート、ジャケット、ベストなど)
- ・制服デザインで大切なポイントを学ぶ(学校の特徴、見た目だけでなく、地域や季節に合わせる、統一感、スタイルよく、学生らしい制服)
- ・今回のデザイン・プレゼンテーションのルールを知る

3時間目

制服のデザインを考える②

- ・制服に関する単語の復習
- ・色や形などをグループで考えて実際にデザインしていく

発表の準備をする

- ・発表の原稿の構成、使う表現を学ぶ
- ・グループごとに自分たちがデザインした制服を紹介する原稿を考える

発表会

- ・各グループ5分以内の発表
- ・発表終了後、プロジェクトの感想(楽しかったこと、難しかったこと)をグループでまとめる

デザインがくりは大変だったけど、友達と協力してできた。



自分がデザインした制服をみんなが「かわいい」と言ってくれた。

発表で緊張した。

みんなの意見をまとめるのは難しかった。



「好朋友文化体験の場」の詳細はこちら

語って、ほぐして、仕込みます！

探究する学びを分析・デザインする

2015年から実施している稲垣忠・東北学院大学教授によるワークショップでは、学習者が自ら課題を設定し、必要な情報を集め、整理・分析し、制作物にまとめたり発表したりする探究的な学びをテーマに据えています。

探究は一人ひとりが自ら設定した

課題に自律的に取り組むのが究極の姿ですが、日本の多くの学校で取り組むには時間の確保等、課題がいくつかあります。そこで、このワークショップでは、グループやクラス単位で探究的な課題解決に取り組むプロジェクト型学習をベースにした単元設計を提案しています。多くの学校のさまざ

まな教科で取り入れられるよう稲垣教授が考案した「情報活用型プロジェクト学習」の理論に基づくもので、単元の活動を情報の収集・編集・発信の3ステップで構成するため、探究を支える情報活用能力の育成にもつながります。

5回目となる今回は、春休み期間

【図】「語る」「ほぐす」「仕込む」の3ステップ

Step 1

【語る】 子どもの目線で 探究の物語を描く

情報活用の収集・編集・発信の3ステップを26種類の具体的な活動に落とし込んだ「学習活動カード」³から、自分のクラスの子どもたちが探究する際に使いそうな活動を選ぶ。最初に「課題づくり」、最後に「振り返り」のカードを置き、その間の活動をほかのカードを使ってシミュレーションしながら並べる。教師目線を離れ、子ども(学習者)になりきって探究の道のりをたどるのがポイント。

Step 2

【ほぐす】 探究を支えるスキルと 学びの深まりを分析する

Step1で描き出された子どもの探究プロセスを支えるスキル(情報活用能力)を検討する。子どもたちの制作物に教科の学びの深まりが表れているか見極め、評価するためのルーブリックを、思考と表現の2観点にしばって作成(思考は制作物の内容、表現は制作物の見た目の工夫)。

Step 3

【仕込む】 探究を支える教師の 手だてを考える

子どもたちの課題への出合いをどのようにつくるか、活動を助けるためのツールや仕かけをどうするか、発表・振り返りで何をするのか、それぞれにどのくらいの時間をかけるのか等、具体的な計画を立てて単元デザインシートを完成⁴。

^{*3} 「学習活動カード」は下記のページからダウンロードできます。Step1~3の詳細も掲載されています。
<https://ina-lab.net/special/joker/pbl/#Narrate>



^{*4} 参加者が作成した単元デザインシートとルーブリックは稲垣先生が運営するRubric Bankで閲覧可能です。
<https://mmt4.cs.tohoku-gakuin.ac.jp/>



「語る」「ほぐす」「仕込む」の3ステップ

先生方は、探究的な学びを実施した(あるいはこれから実践したい)単元の資料を持参し、上の図の三つのステップにそって、個人作業とグループや全体での共有・ディスカッションを繰り返し、4月から実施できる単元のデザインを完成させました。

子どもの目線から探究の物語を たどる意味

終了後の参加者アンケートでは、



「来年度から実践したくなった」「学習活動カードを使うことで考えが可視化された」「単元デザインシートがあると、学習計画やほかの教員との共有がしやすい」など、おおむね高評価でした。

一方で、ルーブリックづくりは難しいというコメントも複数ありました。稲垣教授によると、ルーブリックづくりは、まず教材を分析的、構造的に捉えたうえで子どもたちがつくる成果物の質をイメージする必要がある、コツをつかむまでにある程度時間が必要だそうです。「子どもたちの実際の成果物に表れる質的な違いに着目しながら試行錯誤を繰り返してみてください」とのことでした。

オンラインでの実践フォローと 先生自身が探究する場づくり

また、Step1の「子ども(学習者)の目線」で探究の道のりをたどる際、途中から教師目線にスイッチし、「この学びを深めるにはどうしたらいいんだろう」と手だてを考え始めてしまうグループもありました。稲垣教授は、「子どもたちが自立して学ぶのが究極の探究。教師が手取り足取りお膳立てしすぎないよう、学習活動カードをうまく使って、探究する子どもの立場で探究を物語ってほしい」と話していました。

また、Step1の「子ども(学習者)の目線」で探究の道のりをたどる際、途中から教師目線にスイッチし、「この学びを深めるにはどうしたらいいんだろう」と手だてを考え始めてしまうグループもありました。稲垣教授は、「子どもたちが自立して学ぶのが究極の探究。教師が手取り足取りお膳立てしすぎないよう、学習活動カードをうまく使って、探究する子どもの立場で探究を物語ってほしい」と話していました。

^{*1} <http://ina-lab.net/special/joker/pbl/>



^{*2} アンケートの集計結果
<https://www.tjfor.jp/information/3555/>



【事業データ】

語って、ほぐして、仕込みます！ 探究する学びを分析・デザインするワークショップ

期日：2019/3/24(日)、場所：東京、主催：学びの質ルーブリック研究プロジェクト、TJF、助成：JSPS 科研費 16K01123、協力：(一社)IOS コンソーシアム、講師：稲垣忠(東北学院大学教授)、参加者：小・中・高校の教員25名

ワークショップ「伝えたいことを深く掘ってCMをつくる」(第5回)

期日：2018/5/20(日)・6/24(日)、場所：大阪、ファシリテーター：近藤祐見(株式会社電通CMプランナー、(一財)生涯学習開発財団認定ワークショップデザイナー)、参加者：中・高校の教員など8名

ワークショップ「アート作品を味わう。コトバにする。コトバをさく。カタチにする。」

期日：2019/3/30(土)、場所：東京、ファシリテーター：岡崎大輔(京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センター副所長)、参加者：小・中・高校の教員など15名

レクチャー「21世紀の言語教育の新しい方向性—ツールとしての言語教育から地球市民育成の言語教育へ」および実践報告

期日：2018/8/18(土)、場所：札幌、講師：當作靖彦(カリフォルニア大学サンディエゴ校教授)、参加者：北海道内の高校外国語教員17名

レクチャー・ワークショップ「プロシーメントテストの理論と実践：効果的なパフォーマンス評価」

期日：2018/8/22(水)、場所：沖縄、主催：沖縄県教育委員会、共催：TJF、講師：當作靖彦(カリフォルニア大学サンディエゴ校教授)、参加者：沖縄県立高校の外国語教員60名



「学びの探究とデザイン」
の詳細はこちら





「めやす」のさまざまな活用

2018年度めやすマスターの有志が企画した研修が国内外で実施されています。研修テーマも「外国語学習のめやすとは何か」から一歩踏み込んだものが取り上げられています。2018年度は、「めやす」に基づいたプロジェクト型学習のための目標分解、「めやす」と比較しながらCEFR（欧州言語共通参照

枠）を考察することがテーマとなりました。どちらも講義後は実際にグループでのワークがあり、研修後のアンケートでは、「理論と実践が結びついた」という回答が多くありました。

こうした研修だけでなく、多くのめやすマスターが「めやす」をさまざまな解釈し、自分の教育現場にあわせて活用しています。

大学の日本語教員養成課程で「めやす」を用いた授業づくりに取り組ませたり、中国語教職課程の学生に「めやす」に基づいたプロジェクト型授業をデザインさせ、小中高校生を募って実際に授業を行わせたり、異なる言語の複数のマスターが合同で一つのプロジェクト型授業をデザインし、各自の学生に実

施してその成果を共有したり、さまざまな研究・実践の成果を二冊にまとめたりと、当初想定していなかった取り組みが行われています。

*2013年度から3回実施しためやすマスター研修で55名のめやすマスターが誕生した。

日本語教員養成課程に「めやす」を取り入れる

澤邊 裕子
宮城学院女子大学
教授



私は2014年度より、日本語教員養成課程のなかのゼミにおいて「外国語学習のめやす」を取り入れた実践を行っています。日本語教育現場でコミュニケーション能力の育成が重視されるようになって久しいですが、それでも言語領域の「わかる」と「できる」の力までが重視されていて、なかなか「つながる」力の育成までには至らないように思います。そこで、言語・文化・グローバル社会領域における「つながる」力を育てる日本語教育実践とはどのようなものかを、日本語教育を学ぶ学生たちとともに模索したいと考えました。2019年度のゼミでは前期に「めやす」の理念を学び、その考えに基づいて単元案を作成しました。そして後期に、その単元案を土台にして実際に高校留学生の日本語サポートというボランティア活動のなかでプロジェクト学習を企画しました。10月から1月までの4ヵ月間にわたって好きな場所紹介、旅行計画づくり、国の料理や行事の紹介など4つのプロジェクト学習を実践しましたが、留学生たちは生き生きと学び、プロジェクト学習を通して身につけた力を高校のなかだけでなく外の人たちとの交流場面で発揮し、「つながる」力が育っていることを私たちに見せてくれました。そうした留学生の学びの過程を間近で観察し、実践を振り返り、次の実践を考える、そのプロセスをゼミ生たちは経験しています。文型積み上げ式の日本語教育の実習だけでは経験できない学びにつながっています。

めやすマスターの一人、田原憲和(立命館大学准教授)編著で、2019年4月に三修社より刊行された本書には、めやすマスターを含む19名の報告が収められている。

【事業データ】

「外国語学習のめやす」に基づいたプロジェクト型学習のための目標分解
期日：2019/2/25(月)、場所：兵庫、主催：Let's めやす、TJF、講師：山崎直樹(関西大学教授)、参加者：23名

外国語教員のためのCEFR「外国語学習のめやす」と共に考察
期日：2019/3/8(金)、場所：兵庫、主催：Let's めやす、TJF、講師：奥村三葉子(鹿児島キャリアデザイン専門学校・鹿児島医療技術専門学校講師)、参加者：23名



「めやすWeb」
はこちらから

先生たちのほしいに応える

2015年に配信を開始したClick Nippon News(CNN)は、主に英語圏の小中高校で日本語を教える教師を対象に、日英二言語で月に一回無料配信しているメルマガです。TJFのウェブサイト「くりっくにつぽん」や「ときめき取材記」の記事を使って、ディスカッションを促したり、文化理解や思考力を深めたりする学習活動を紹介しています。

創刊から三年がたち、CNNの内容をさらに充実したものにするために、読者の先生がCNNをどのように活用しているのか、そして、CNNに何を求めているのかを尋ねるアンケート調査を実施しました。

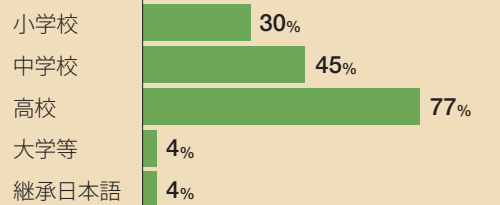
その結果、CNNから「日本で話題になっていることを知った」「文化理解の新たな視点を得た」「授業内容が深まった」という回答が多く、活用されていることがわかりました。

今後は、要望が多かった小中学生向けの活動案を増やしていくと同時に、活動に、よりバリエーションをもたせていく予定です。

アンケート結果

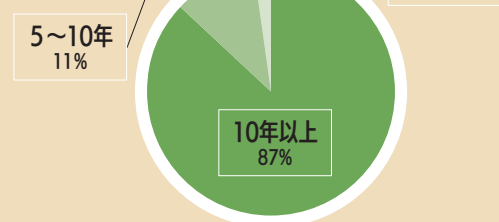
※回答総数105件(オーストラリア、カタル、カンボジア、台湾、ニュージーランド、米国など)

●所属(複数回答)



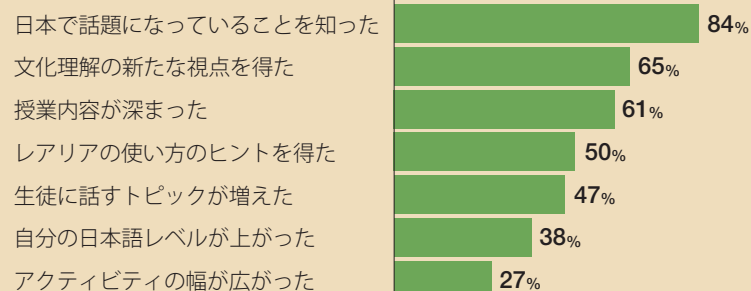
⇒想定以上に小中の所属が多い

●教師歴



⇒ベテランが中心

●CNNがどのように役立っているか(複数回答)



●感想

さまざまなコンテンツがあるのでいろいろなタイプの生徒に対応できるし、授業のディスカッションも深まる。

小学校の教師なので授業では使えないが、日本の知識と教え方を豊かにしてもらっている。

一人でやっていると同じような内容や活動に偏りがちだが、こんな面白い活動があるんだという発見ができていい。

授業を考えたときや、私の授業を改良するのにとても役立っている。

今話題になっていることがらは生徒の関心をひく。



「Click Nippon News(CNN)」
のバックナンバーと登録はこちらから

【事業データ】

メルマガ「Click Nippon News」配信
配信日：毎月第3木曜日、対象：主に英語圏の初中等の日本語教師、登録者数：約830名



知らない文化にふれる

さまざまな文化やことばにふれる「りんごをかじろう」。20

18年はインドで出家した仏僧の草薙龍瞬氏を講師に迎え、「心を健康にする瞑想法とだれも知らないインドの話」を実施しました。

集中力を高め、ストレスを軽減するスキルとして「マインドフルネス」が注目されていますが、そのルーツは2500年以上前のインドでブッダが説いていた、心を健康にする考え方にあるそうです。

草薙氏は、自分の心の状態を「理解すること」で、心の苦しみから抜け出せると言います。瞑想は「理解する」という心の使い方のトレーニングであり、感情ですぐに反応するのではなく、心の内側や身体感覚に意識を向けることが大事だと述べました。参加者は実際に椅子に座っての瞑想と、ゆっくりと歩いて行う瞑想を体験しました。

その後、インドで教育の機会のない子どもたちを支援するNGO活動を通じて草薙氏が見たインドの現実や人びとの暮らしについて話があり、メ



ディアでは報道されないリアルなインドの姿にふれ、質疑応答が続きました。講師と気軽に話ができることもイベントの魅力のひとつです。



写真はすべて@金子怜史



TJFが実施するイベントは毎月第3水曜日に配信しているメルマガ「わやわや」でお知らせします。ぜひメルマガ配信にご登録ください。



【事業データ】

りんごをかじろう「心を健康にする瞑想法とだれも知らないインドの話」

期日：2018/11/24(土)

場所：東京

講師：草薙龍瞬(僧侶・興道の里代表)

参加者：28名

「りんごをかじろう」の詳細はこちら

TJFを支援してくださっている方々

TJFは皆さまからご協力、ご支援をいただき事業を行っています。
2018、2019年度も下記の皆さまに支えていただきながら事業を進めました。
改めましてお礼を申し上げます。

賛助会員

〔法人〕

〈2018年度〉 王子製紙(株) 鹿島建設(株) 春日製紙工業(株) 共同印刷(株) キングレコード(株) (株)廣済堂 (株)講談社ビジネスパートナーズ (株)光文社 (株)国宝社 (株)世界思想社教学社 第一紙業(株) (株)第一通信社 大日本印刷(株) (株)電通 (株)トーハン 図書印刷(株) 凸版印刷(株) 豊国印刷(株) 日興紙業(株) 日本出版販売(株) 日本製紙(株) 日本図書普及(株) (株)フォーネット社 富士ゼロックス東京(株) 二葉製本(株) 北越紀州製紙(株) 丸王製紙(株) 丸住製紙(株) 丸紅紙パルプ販売(株) (株)三井住友銀行 三井住友信託銀行(株) 三菱製紙販売(株) (株)三菱UFJ銀行 (株)彌生洋紙店

〈2019年度〉 王子製紙(株) 鹿島建設(株) 春日製紙工業(株) 共同印刷(株) キングレコード(株) (株)廣済堂 (株)講談社ビジネスパートナーズ (株)光文社 (株)国宝社 (株)世界思想社教学社 第一紙業(株) (株)第一通信社 大日本印刷(株) (株)電通 (株)トーハン 図書印刷(株) 凸版印刷(株) 豊国印刷(株) 日興紙業(株) 日本出版販売(株) 日本製紙(株) 日本図書普及(株) (株)フォーネット社 富士ゼロックス東京(株) 二葉製本(株) 北越コーポレーション(株) 丸王製紙(株) 丸住製紙(株) 丸紅紙パルプ販売(株) (株)三井住友銀行 三菱製紙販売(株) (株)三菱UFJ銀行 (株)彌生

〔個人〕

〈2018年度〉 石井恵理子 石井誠 市原徳郎 カイト由利子 高崎孝 高嶋伸和 細谷美代子 松井外恵 柳川敦重 匿名希望1名

〈2019年度〉 石井恵理子 石井誠 市原徳郎 カイト由利子 高崎孝 高嶋伸和 細谷美代子 松井外恵 匿名希望1名

助成団体

〈2018年度〉 韓国国際交流財団 (一社)尚友倶楽部 (公財)日韓文化交流基金 (公財)三菱UFJ国際財団

〈2019年度〉 (一社)尚友倶楽部 (公財)日韓文化交流基金 (公財)三菱UFJ国際財団 李熙健韓日交流財団

寄付者

〈2018年度〉 (株)講談社 任喜久子 内田憲孝 岡島正修 上村圭介 岸昌代 顧文君 小溪教材研究チーム 菅陽子 高橋悦子 長春YO 唐涛 内藤亮夫 内藤水音 服部圭子 平井和之 松尾雅広 宮内孝子 森本芙佐子 山川響子 吉田忠正 和栗雅子 匿名希望4名

〈2019年度〉 (株)講談社 内田憲孝 何美津子 桑原公男 祭貴貴美子 佐藤篤 佐藤宏子 菅陽子 (株)HANATOUR JAPAN 三田崇文 匿名希望1名

(敬称略 五十音順 2020年1月末日現在)

組織

評議員会

任期：一期4年

評議員会長	野間 省伸	(株) 講談社代表取締役社長
	足立 直樹	凸版印刷(株) 特別相談役
	木坂 隆一	王子製紙(株) 代表取締役社長
	北島 義斉	大日本印刷(株) 代表取締役社長
	豊泉 俊郎	三菱UFJ証券ホールディングス(株) 特別顧問
	長瀬 真	三菱地所(株) 社外取締役
	馬城 文雄	日本製紙(株) 取締役会長
	山根 隆	(株) 講談社顧問

理事会

任期：一期2年

理事長	渡邊 幸治 *	元駐ロシア特命全権大使
常務理事 (常勤)	水口 景子 *	
理事	上野 田鶴子	特定非営利活動法人日本語教育研究所理事
	金丸 徳雄	(株) 講談社常務取締役
	興水 優	東京外国語大学名誉教授
	境 一三	慶應義塾大学経済学部教授
	佐藤 郡衛	明治大学国際日本学部特任教授

* は代表理事

監事

任期：一期2年

清水 至	公認会計士
白石 光行	(株) 講談社常任監査役

顧問

任期：一期2年

大春 敦	日本製紙(株) 執行役員情報・産業用紙営業本部長
北島 義俊	大日本印刷(株) 代表取締役会長
酒井 和彦	日本出版販売(株) 専務取締役専務執行役員
鈴木 孝夫	慶應義塾大学名誉教授
田仲 幹弘	(株) トーハン取締役副社長
鮑 啓東	人材派遣健康保険組合前理事長
三木 繁光	(株) 三菱UFJ銀行名誉顧問
吉田 研作	上智大学教授

(敬称略 五十音順 2020年1月末日現在)

事務局

事務局長／鈴木 律子
 チーフ・アドミニストレイティブ・オフィサー／藤掛 敏也
 チーフ・プログラム・オフィサー／室中 直美
 シニア・プログラム・オフィサー／千葉 美由紀 長江 春子
 職員／柴田 幹子 沈 炫旼 中野 敦 宮川 咲 森 亮介

事務局長交代のごあいさつ



事務局長

鈴木 律子

「私たちの人生の目的は、現在、そして未来の世代の人びとのために新たな貢献をすることである。」

これは、1960年代に建築家・思想家であったバックミンスター・フラーがのこしたことです。フラーはまた、地球を、宇宙を漂う船と見立て「宇宙船地球号」という概念を提唱したことでよく知られています。それでは宇宙船地球号はどんな状況にあるでしょう。

から見た大きな変化、そして人間の話す「ことば」も、総人口77億人の約半分の人びとは「23」の言語しか話していないといわれ、その陰で全世界におよそ7000ある言語が急速な勢いで消失しつつあります。

今を生きる若い人たちに、私たちはどんな社会を手渡していくことができるのか、TJFの一員としてさらに一層の創意工夫を凝らして事業運営にまい進しなければならないと、気持ちを新たにしております。どうぞよろしくお願いいたします。



常務理事

水口 景子

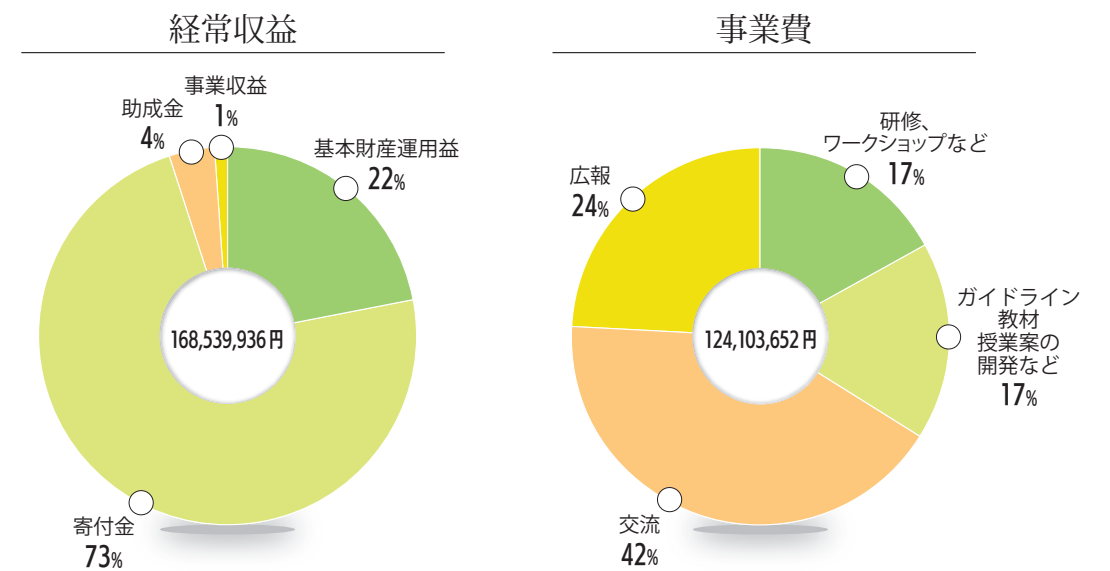
1994年に国際文化フォーラムに入局して以来、さまざまなプログラムに関わってきました。2011年に事務局長に就任してからは、諸先輩方が築いてくださった枠組みを土台に、皆さまの協力を得て、ことばと文化の学びや交流事業の発展をめざしてきました。

2017年にTJFは設立30周年を迎えました。新たな30年を考えると世界や社会状況の変化のスピードはますます加速し、複雑で見通しを立てるのが難しくなっています。このような状況では

ありますが、これまで積み上げてきたことを生かしながら、さらにバージョンアップしたプログラムを提供していきたいと思っています。この度、新しいステージに向けて動き出すにあたり、事務局長を鈴木律子にバトンタッチしました。今後は常務理事として財団運営に引き続き関わっていきます。

TJFをさまざまな形でサポートしてくださっている皆さまに深く感謝申し上げますとともに、今後とも変わらぬご支援ご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

設立	1987年6月22日 2011年4月1日、公益財団法人に移行
出捐企業	王子製紙株式会社 株式会社講談社 大日本印刷株式会社 凸版印刷株式会社 日本製紙株式会社 株式会社三菱UFJ銀行
基本財産	20億円
財政規模	2018年度の経常収益は約1億6,854万円、事業費は約1億2,410万円。 内訳は以下の通りです。



サポートのお願い

さまざまなことばや文化の学び、交流を通じて、子どもたちが21世紀を生きぬく力を育むことがTJFのミッションです。このミッションを達成するために、共感していただける方々に次のようなご支援をお願いしております。

- ▶ **寄付** TJFの活動全体に対する寄付、特定の事業を指定する寄付があります。
- ▶ **賛助会員** 継続的な支援をしていただける方に賛助会員になっていただいています。
年会費：〔法人会員一口〕50,000円 〔個人会員一口〕10,000円

寄付金につきましては、税制上の優遇措置が適用され、所得税や法人税の控除を受けることができます。さらに、個人寄付者の皆さまには確定申告の際、減税効果の高い「税額控除方式」を選択していただけます。ご支援くださる方々には、TJFが発行する印刷物を送付するほか、TJFが主催するイベントのご案内を差し上げています。



国際文化フォーラム事業報告
CoReCa 2018-2019
2020年3月発行

デザイン 山本義明 (goldfish design)
編集協力 古賀亜未子 (エスクリプト)
印刷・製本 凸版印刷株式会社

編集・発行 (公財) 国際文化フォーラム

〒112-0013
東京都文京区音羽 1-17-14 音羽YKビル 3F
Tel 03-5981-5226
Fax 03-5981-5227
Email forum@tjf.or.jp
URL www.tjf.or.jp
Facebook www.facebook.com/TheJapanForum

ISSN 2189-6208
©2020 by the Japan Forum, Printed in Japan

